ぶらっと半田　　2007.10.20

豊田佐吉、清水次郎長の足跡が残る街

10 月 20 日半田観光ボランティア主催の「ふるさと散歩. 乙川」に妻と一緒に参加した。散策は乙川八幡社をスタートして、9.00”～12.00”までの予定でコースは次ぎのようなものである。

①乙川八幡社---②旧中島飛行機跡---③乙川人形---④旧石川籐八邸---⑤光照寺---⑥白山公園---⑦半田ハリストス正教会---⑧海蔵寺。

ここから乙川八幡社に戻るもので、興味深い史跡が一杯のコースだ。

八幡社のお祓いを受けてスタート

少し早めに着いて受付をすると、散策コースの地図をはじめとする説明資料を渡された。見ると、各史跡についての説明はもちろんだがいろいろな写真も掲載されており、私たちにとってはとても素晴らしいテキストだった。自分が作る立場になったことを考えると、これを作成する努力は大変だったろうと感心させられた。

会場には先回タイへご一緒した吉森さんの顔も見え、久しぶりの再会ができてうれしかった。時間になると、拝殿に入って腰掛けるように案内されて、30 人ほどがぞろぞろと移動して折りたたみイスに腰掛けた。最初に事務局代表から、今回の趣旨などについてなかなか旨い挨拶があった。

本殿と熱心に説明してくれた宮司

そのあと宮司より全員が事故のないようにお祓いを受けた。場所が場所とはいえ、スタート前に無事故を願っての企画は GOOD といえる。

と思っていたら、そのあとがまたまた GOOD だった。ここの宮司はめちゃめちゃくだけた人で、普段は見ることが出来ない本殿前まで全員を案内してくれ、さ

らには本殿の階段上まで上がって、且つ、扉をあけて本殿の造りから歴史に至るまで説明してくれたのだ。
そのうえ、他の神社などでは神様を写真に撮るなど許されない行為だが、それも許可してくれた。

乙川八幡社は

ここの地はもともと阿久比郷だった所で、海の神を祭る「入水上社(いりみずかみしゃ)」だった。江戸時代の文政9年(1826)本殿が造営され、明治13年(1880)拝殿が再建され八幡社となる。そのため、入り口の大鳥居には入り口側は「八幡社」出口側からは「入水上社」と書かれている。
本殿はかなり大きなもので、彫刻は彫師「彫常」に師事した彫り物棟梁の早瀬長兵衛作のもので、いかめしい顔の龍が左右の梁に一対。昇り竜、下り龍として知られている。

また、先日は半田山車まつりが行われたが、祭礼の山車を描いた絵図(宝暦5年(1755)に乙川八幡宮神主榊原若狭が作成)が保存されており半田市の有形文化財に指定されている。

昔を語る旧中島飛行機.滑走路跡

八幡社を三班に分かれてスタート、私は一斑の竹内さんのグループになった。他は面識のある新美さんと友の市野君がガイドである。
初めに南方面へ向かいJR乙川駅横で武豊線をわたる、すぐに国道247にぶつかる。衣浦大橋方面からいつも交通量の多いルートである、その道路沿いにSUBALの文字が浮かぶ富士重工がある。ここが旧中島飛行機の工場跡で、今は見えないが滑走路は左側の亀崎寄りにあった。

そもそも何故ここに飛行機工場ができたのか、昭和10年半田市は衣浦湾埋め立てによる工業立地計画があって、海軍航空隊新設の候補地であった。しかし、その後航空隊は河和に決定して敷地が空いた。そこへ群馬で用地を物色していた中島飛行機が、海軍からの情報を得て進出。昭和17年には工場建設が始まり、翌年9月には、群馬より生産部隊の本格的な転任が始まった。

造った飛行機は

艦上攻撃機「天山」の生産が開始され、昭和18年12月に1号機が完成した。翌年6月には艦上偵察機「彩雲」の1号機が完成した。完成した飛行機は牛が引いて滑走路まで移動して、ここで燃料を入れたという。それほど燃料が逼迫していたのだ、それに、滑走路は1.000mしかなくて飛び立つことはできても、着陸は出来ない未完成なものだった。工場の立ち上げにより、半田市乙川地区の人口は5.000人ほどだったものが、一挙に26.000人も増えて30.000人余となったのです。友の書いた**半田十話物語のなかの「天山.彩雲を造った人と操縦した人」**では次のようなことがらが紹介されています。

平成 19 年 5 月 20 日白山公園下の乙川公民館で、当時、彩雲の工場長だった芹沢さん(93 歳)と、両機を操縦した榊原さん(84 歳)が出席して対談が行われたのです。その内容としては-------生産した飛行機は、当時としては世界一の性能を誇った天山 977 機、スピードを誇った彩雲 440 機を造った。そのための要員として、事務系 1.613 人、技術系 474 人と正規工員が 7.073 人の 10.000 人にも満たない正規従業員しかいなかった。反面、徴用工 4.731 人、女子挺身隊 2.127 人、学徒動員生 10.129 人もいた。つまり、半分以上は素人や女.子供たちの集団で、世界一の飛行機を造り上げたのだ。

そんなことが出来たのは、芹沢さんたち技術者が最高の技術を要した航空機製造の過程を、徹底して分業化.細分化して小学生にも分かるように努力したからです。学徒動員生だった方のこんな質問があった「私たちの造った飛行機は無事に飛んだのでしょうか」、芹沢さんは「設計図通りに作られた部品はみな使いました」、榊原さんは「当時の飛行機に故障はつきもので、中島で造った飛行機がどうのということはありませんでした」と答えられ、質問した方は 60 年来の胸の痞えが取れたと安心して帰られたという。

このほかに、芹沢さんは数万人の社員.従業員を定住させるために都市計画も企画して、設計図も作成していました。それが完成すれば半田市は 30 万人の大都市になるはずでしたが、工場も住宅も半分も造らない内に終戦を迎えました。終戦を迎えたことはよい事に違いありませんが、半田市の発展にとってはどうだったのでしょうか。

京都伏見の技術を今に伝える乙川人形

飛行機工場を後に製塩跡に向かう。JR 武豊線を再度わたり、きた道を少し戻り入り江跡に着く。知多半島では各地で塩造りが行われていたが、ここ半田でも乙川の浜側町と成岩の港本町で製塩土器が見つかっている。大きくカーブした川は一見したところただの川だが、この辺りは海であった所だ。浜側町の JR 武豊線に沿った辺りで製塩土器のかけらが見つかっているという。

乙川人形屋

猫のヒゲ付け

川沿いに少し進むと乙川人形屋と書かれた家が見えてきた。乙川人形の歴史は、幕末の頃飛脚屋を営んでいた杉浦伊左衛門が、京都伏見から人形製作技術を学んで製作したことに始まる。以来、伝統技術は今に伝えられて、その技法は豊橋など三河系土人形に強い影響を及ぼした。現在は六代目が継承してダルマ、招き猫、福助など招福を主題とするものが中心。

工場の中を見せてもらったが、土を練るところは先日見学した瀬戸と同じようだった。2 階では招き猫にヒゲをつける工程を、わざわざ見せてくれた。その横に完成した招き猫がたくさん置いてあったが右手を上げているものと、左手を上げているものがあった。違いを聞くと、右手を上げているのは「お金」を招き、左手を上げているのは「お客」を招くのだという。これから買うときには右手を上げているものにしよう。帰りには希望者に素焼きの「ほうろく」をお土産に出され、妻も小ぶりのほうろくをいただいた。

次郎長地蔵の置かれる光照寺

乙川人形屋を出て少し歩くと、乙川城跡といわれる正通寺がある。雑木が茂って今ではお寺の風情はないが、鐘楼だけが残っている。天文 12 年(1543)頃、水野信元が築き竹本左門に守らせたといわれているが、お城らしい面影は何もない。ここから殿町へ出たら、珍しい「銭湯」があった。今も営業中であるというから、それなりに利用者はいるということだ。聞けば、やはり湯船には富士山の絵があるという。ここからほどなくして光照寺に着いた。今日は何か行事があるらしくて、境内にはトラックも止まり人々が行きかいざわついていた。このお寺は文化 8 年(1811)に本堂はじめ庫裏などが落成した。

次郎長地蔵

本堂の隣には別棟のとても立派な観音堂がある。この観音堂は鳴海陣屋と、乙川の支配者であった城代家老成瀬隼人正に懇願して建立したものといわれ本尊は十一面観音で、亀崎の漁夫が網にかかったものを祀ってあるといわれている。そして、知多四国霊場.18 番札所でもある。
境内の一角に「次郎長地蔵」と呼ばれる地蔵がある。おなじみの清水次郎長は、大政、小政、八五郎の三人の子分を引き連れて、半田亀崎での相撲興行中の仇敵、ホゲタの久六を呼び出して、乙川吉野畷で待ちうけ、悪口雑言の久六の右腕を斬落した。この一戦の前に道脇の地蔵に勝利を願ったという。それ以来次郎長地蔵とか心願成就の地蔵尊とされている。県道拡張のため光照寺境内に移されたが、今も名所になっている。

豊田佐吉が研究に没頭した「旧石川藤八邸」

光照寺へ行く手前の路地を入った所に、立派な門構えの黒塀の家がある。ここが旧石川藤八の家で、若き日の豊田佐吉が明治27年頃に7代目藤八と出会い、彼の家に身を寄せて、2 階で新型力織機の研究を始めたという。

旧石川藤八邸

そして明治 30 年(1897)秋、藤八が 6.000 円出資して「乙川綿布合資会社」を設立。翌年春には豊田式力織機による綿布が出荷され、同年 8 月 1 日豊田式力織機の特許を取得したのだ。
佐吉が支援者の力を得て、地元知多のそれも目と鼻の先で織機を造ったとは驚きだった。トヨタグループに身をおいていたものの、これらのことはまったく知らなかったのだから。

明治天皇が演習をご覧になった白山公園

今度は光照寺横の大通りを歩いて西の宮まで移動する。ここでは西の宮貝塚のあった場所だけ確認して、西の宮池の横を通って白山公園への坂道をのぼっていく。途中に乙川公民館があり、ここでトイレ休憩を少しとった。そのとき一人のご老人から「どちらからこられたのかな」と声をかけられた。
ふるさと散歩のことを話すと、「それはよいことだ、私もここに住んでいるが、ここならどこへ行くのにも歩いて行く事ができる」と話しておられた。ここからほどなくして白山公園に着いた、立派なトイレも設置されて子供たちの遊び場もあった。ここ白山は明治 23 年 3 月 29 日～4 月 2 日まで、わが国初の陸海軍合同演習が行われ、30 日には半田を中心に知多半島がその舞台になった。
このとき明治天皇は、半田の小栗富次郎邸に宿泊されたが、大雨の中天皇が道に迷い、村人が天皇とは知らずに案内したとか、庭先にあったサボテンに注目され、その名前を尋ねられた。それにたいし関常六さんは当地の呼び名で「シャシャラシャッポ」と答えられた、ということなどが語り継がれている。しかし、そのサボテンも今はない。
陸海軍の合同演習がこの地に選ばれた理由は
①当地が日本の中央部
②東西の新旧の首都を結ぶ幹線鉄道の中央部
③演習でこうむる物的損害をものともしない活動. 経済力があった
④大本営開設が可能な富豪たちの存在　------　といわれている。
公園内には、明治天皇がここから訓練の様子を眺められたことを説明した「駐蹕跡(ちゅうひつし)」と記した碑が建てられている。これは乙川小学校校長、林和三郎氏が明治 24 年 11 月 3 日当時の天長節に建てたものという。

「駐蹕跡(ちゅうひつし)」と記した碑

何の碑だったかな?

乙川にあった日本ハリストス正教会

小高い白山公園を降りて少し行った所に、半田ハリストス教会はあった。普通の日本建築で屋根瓦にクルスが施されているが、それがなければ教会とは気がつかずに見過ごしてしまう。
道沿いの塀には半田ハリストス正教会、イオアン．ダマスキン聖堂とあり説明がされている。それによると、日本には 1861 年ロシア正教の聖ニコライによって伝道されました。知多半島への伝道は明治 10 年代半ばに開始され、内海、常滑、半田、乙川、横須賀などに伝道所が設けられました。知多半島にも明治時代には 500 人くらいの信者がいた、しかし、現在は乙川のハリストス教会だけが残っている。
東京神田のニコライ堂は日本の本山、函館のハリストス教会は姉妹教会にあたるという。

ハリストス正教会とその看板

海蔵寺の庫裏は「鳴海千代倉」から移築した

教会を後にして海蔵寺へ向かう。途中、シャシャラシャッポのサボテンがあったという故石川久蔵さん宅前を通り、なかなか立派な若宮神社の前を通り過ぎると、とても広い駐車場を配した海蔵寺に着く。ここは別名「行者堂」とも呼ばれている、というのもお寺であるが役行者が祀られているのだ。
本尊は釈迦牟如来で脇士に文殊と普賢の両菩薩を祀る、これを「釈迦三尊」といい、文殊菩薩は知恵を、普賢菩薩は慈悲をつかさどる。
ここのお寺は昭和 27 年頃、近隣の飛び火を受けて火災にあった。その後で建て替えて本堂の屋根は瓦葺となり、庫裏は鳴海の千代倉より移築したものだ。堂々たる建物は建築学的にも高い評価があるという。江戸時代半ばの豪商をさして「半田半六 緒川じゃ源左　鳴海下の町千代倉よ」といわれていたのだ。その千代倉の建物というだけあって、堂々たる姿は正に日本建築の素晴らしさをみせていると感じた。

海蔵寺本堂

鳴海千代倉より移築された庫裏

この後天文 12 年(1543)緒川の水野信元が築城したという飯森城跡を見る。北側には堀跡と土塁が残っているというが、城跡には城を守った稲生光春の子孫?の家が建っており、様子はよく分からなかった。
予定のコースを回りここで解散となったが、たくさんのことを知ることが出来た散策は、心地よい 12.000 歩であった。